
妖怪恋物語

ゆうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪恋物語

【ZINE】

Z9863Y

【作者名】

ゆうた

【あらすじ】

吸血鬼の男の子と普通の女の子が織り成すバカな小説です

モノローグ

「おはよー」やこます　武羽智美はづみといいます　今月この学校に転校してきました者です　宜しくお願ひ致します」

そう言うと私は頭を下げた

お父さんの仕事の関係でこの学校に転校してきた　転勤だつけな？
そう言ってたけど本当は島流しなのだ
島まで流されたわけではないけど

ま～ド田舎だ　ウン

「ん、武羽は左から2番田の一番後ろの席に座つてくれ
これからHエイチ Rアール始めるぞ～」

前の席の人は銀髪　赤眼の男の人だった

（不良かな？）

「あの……おはよー」

「ああ　おはよー」

につじりとおはよーと返してくれる

「部活は？」

「テニス」（幽靈部員ホーリーでしょ）

「趣味は？」

「夜遊び」（やつぱなあ）

「性格は？」

「おとなしい」（嘘付けつ）

「好きな食べ物は？」

「ん～……肉かな？　特にレア」

これらのこと我が今日聞き込みをした結果だ　ウン悪くない
この人はあまり悪そうな人ではなかつた　先生に「なんで銀髪なん
ですか？許してもいいんですか？」
と聞くと「あの子のは地毛だよ　それにあの眼もカラコンではない

らしい」

すごい人も居るもんだ

私は前の学校でもテニス部に入っていたので一応テニス部に入部偶然？奇遇？

部活の時間になるとまず例の子に話しかけた そりいえば名前聞いていなかつたな

「こんにちはつ！ お名前は？」

「……俊咲輝也」

「輝也君だね覚えど！」

「苗字で呼べ」

「えー 名前のほつがいいと思うよ？」

「それとー俺に付き纏うな 痛い目にあうぞ」

「えーなんで？」

そういうとさつきからクスクス笑つている女の子グループを指差した

指差されたグループは一気にシーンとなつて四散した

私はその中の一人を捕まえて簡易事情聴取を執ることにした

モノローグ（2）

「いや 少し話を聞いてもいいかなー？」

「いえ あの その」

私は小動物系というんだろうか？ かわいらしい女の子を壁に当てて脅している

ウン はたから見たら普通に変体行為だね

「まずは……なぜ笑っていたの？」

「いやあ……その……あの……グループでそうなってるんです」「？」

「リーダーみたいな人がそう言つと逆らえないんです」

「中心人物は？」

「い……言えません！」

「ふう ん？」

「ひつ！？」

私はその子を連れて（手首を後ろで縛つて）私が思い当たる女の子のところへ連れて行つた

「やつ 炙さん」

「ああ 武羽さんか 部活は？」

「サボつてますひとつ質問していいですか？」

「なに？」

縛られている女の子はじつとしている

「この子の仲良くしているグループのリーダー的な人つて知つてる？」

この人は学級委員でクラスのことはよく観察していると先生が言つていた

「うーん 御木本さんかしら？」
「つ！」

核心を突いたようだ

（1時間後）

「あら？ 炎羽さんじやない なんで樽谷さんの手縛つてるの？」

「あなたに話があつてきました」

私は手枷を取つて離した すると一田散に逃げた

「なにかしら？」

「輝也君のことです なんであなたの仲良ししているグループで避けてるんですか？」

「そこまでばれちゃつてるの……」

「答えてください」

「つられたからよ」

「……それだけ……ですか」

「もうよ」

「あなたが？」

「そうよ」

「好きだつたんですか」

「今は？」

「そうよ」

「関係ないわ」

「そうですか」

「それで？ あなたが言つたこととはまだナゾやなこなあよ」

「……」

「この人も私のことによんでもくるみたいだつた」

「言ひなさいよ」

「輝也君を阻害するのせやめてくださいよ」

「イヤよ」

「え？」

「イヤよ絶対イヤ」

「なんでですか？」

「私をフツたから」

「……それじゃああなただけ阻害すればいいじゃないですか
あなたおかげで輝也君が肩身の狭い思いしてるとんですよ！？
あなたの影響力を考えたことがあります？」

学校全体が一人を阻害したらどうなるか分かりますか！？」

私はいつの間にか怒鳴ってしまった

前の学校では人前できつぱり言いすぎていじめられていた過去がある
どこかフラッシュバックしてしまったのだろう……

「あなたの言いたいことは……わかった」

そう言ってなんとなく反省した顔でどこかに消えた
部活終了の音楽がながれている 10月のことだった

10月4日

「おはよお」「おはよひりやこまわ」

学校での輝也君への阻害がなくなりた2日後
1日1回じやすまないほど告白されていちらしに すうへ……
しかもその一人田が弔さんで阻害が始まったとい経緯だ

「おはよっ」

「んーおはよー」

私はみんなとは違う挨拶方法なのだ 理由は簡単 私が助けたからである

「その 言ごにくいけどありがとな? お前がいなきや自殺してた
かもしねない」

「いっていって その代わりちやんと周りの人と田を合わせて
会話すること」

「うん お安い御用や」

ガラガラッ

「おはよう みんな席に着け~」

ガヤガヤ

「H R始めるぞお」

来て初日に思つたのだがとんでもなくゆるい先生だ 年齢は…… 2

0台だな絶対

朝のH Rが終わつた次の授業は美術

私の好きな科目なのだ

「なあ あの 教えて?その…… 美術」

「へ?」

「もうすぐ期末じゃん」(一ヶ月あるよ……)

「うん? まあいいけど?」

「ありがと！」

うわあ聞いていた周りの女生徒の視線が痛い 私は逃げ出すよつた
美術棟に向かつた

『一時限目 美術』

「きりーつ きおつけー れー」

「おねがいしまー 」

ガタガタと音を立てて座つた

全くゆるい中学校だ

「はい それでは勉強を始めていきたいと思います

まず 美術資料P39を 」

私は熱心に聞きながら輝也君に教えていた

「それじゃあ ここを 式羽さん

「はー？ はいー？」

あははと声があがる 声が裏返りまくつてしまつた

「……私語を慎みなさい 美術資料P39『最後の審判』の作者

「ミケランジェロ」

「ご名答 どこの協会に作られたかを 栗山君

「バチカン市国」

こんな感じに授業は進んでいった

『帰宅前のH R』

「はーいH R始めるよ

前で輝也君が死んだ顔をしていた勉強は終わつた

もう私が教えたことは完全に覚えたみたいだつた

授業そつちのけでやつてたからなあ

「はーいそれでは解散 起立 きをつけ 礼

「ありが

「授業のときより早い！？」

「部活いこつか

「うん」

『部活』

私は実質 部活は1日しか出でていない

顧問は氷羅先生 女だ

「はいはい（手をパンパン）まずは組でラリー

「はい」

私の相方は和田さん 和田さんが後衛で私が前衛
少しソフトテニスのことを触れないといけない

ソフトテニスとは基本ダブルスで行う

基本的にこのようなポジションをとる

- ・2人とも後ろの『ダブル後衛』
- ・2人とも前の『ダブル前衛』 これは基本中学校ではない
- ・1人前 1人後ろの『基本ポジション』 名前はない

殆どの組は最後の『基本ポジション』だ

ネット前につくのが前衛 後ろのサービスラインでボールを打つのが後衛

前衛は前でスマッシュ・ボレーでトドメをさす役目
後衛は後ろでチャンスを前衛に作る役目

になる

私は1：1のラリーではサービスラインより1歩後ろで打ち返して
相手も同じように打ち返す

そうして ラリー 前衛練習 後衛練習 サービス 生理運動 コ

ート整備 解散

『帰宅後 家』

疲れた

「ただいま」

「おかえり」

母さんが家にいた

かえつてすぐ風呂に入つてご飯

あしたの準備と宿題しなきや

時間割を見る 筆箱を開き中身を見る シャープペンシルを出して
カチカチツ

「なに?」

「文房具？」

「シャーペンの日」

そこで私は“本当”の輝也君を見ることになつたんだ……

10月4日（2）

ガシャリンと自転車をストッパーの拘束から解き放つ
シャアと走り漕ぐ

「ううう 寒い！」

100均一（105円均一）に到着
ちゃんとあるんだな 100円均一

ここの中店時間は…… 10：30！ダイジョブだ
文房具の棚からシャーペンの芯を取つて買った
帰ろうと自転車に乗るうとしたその時

「？」

私は街頭の上に人が座つてゐるのを見るのが初めてだつた田舎人は
みんなするのかな？

いや無理だろう

「だれ？」

「……俊咲 輝也」

「うそ……」

見た目は全然違つた短かつた銀髪は長くロングヘアに
眼はもともと赤かつたのに真ん中に切れ込みの黒い線が入つてゐる

「本当だ 貴様は？」

口調も違う

「私は式羽智美」

「ふむ 曜のクラスメイトか」

……感じが違う

「あなたは本当に輝也君？」

「そうだ どこか違うとも思ったか？」

「性格 見た目」

「ふむ いいところを突いてくるそうだ俺は夜と暁とで人格が違う

「え？」

「吸血鬼は日光を浴びると弱くなると知らないか？」

「吸血鬼……！」

「そう吸血鬼だ 朝の7：00～夜の7：00まで昼の人格
夜の7：00～朝の7：00までは俺の時間だ
そして人格が変わると同時に風貌も変わる」

「信じられない！」

私は自転車に飛び乗つて逃げた
輝也はフウと息をついた

S A I D：輝也

俺はため息を漏らした

やはり人間と非人間は相容れられないものなのだろうか
話しかけられたことは正直ビックリした

昼の人格に夜話しかけてくるような人物はいないはず……
どうしようか本性ばらしてしまったな

……追いかけるか

タツッと8mの電灯から飛び降り、地面を一蹴りした
パンと地面が鳴り上空20mを空中飛行した

1歩で間に合うと

「なんで逃げる？」

「……今どこから来たの？」

「質問に答える」

「あなたは輝也君ではありません」

「なぜ？」

「格好が違うから」

「説明はした」

「私の知っている輝也君はシャツのボタンを3つも開け放したりしません」

「この方が楽だ」

「じゃあいつも学校で我慢してるんですね？」

敬語だな

「人格が違う 昼の奴がどう思おうと勝手だ」

「吸血鬼なんか信じません」

「そうか 残念だ」

俺はまた地面を蹴り向こうに見える山へ足を向けた
山でなくてもよかつたどこでもよかつた
ただ人気のないところへ行きたかった

10月4日(2)(後書き)

加筆しました

10月5日

「……」
私の目の前の人眼はいつもと同じく赤いだけ 黒みがさしている
昨日は真っ赤今日は赤黒い 髪はぱつぱつ切り切った模様
「……」

「一人とも一人共に話しかけない 昨日の事があつたからだ
そだそだこれがあつた

「おりやー！」

私は用意したロザリオ？十字架？をあててみた
「ぐああー！？」

ジュウウと焼ける音がした

「いつてえー！？」

「あはー ゴメンゴメン」

「それは ロザリオ？」

「あーうん 昨日の事があつたから実験」

「昨日……ね」

「なんで焼けるの？」

「焼けているわけじゃない 肉体が嫌がってるんだ」

「へー…………それじゃあ 本物なんだ……ね？」

「うん」

「へー…………他の子には秘密にしておくよ」

「ありがとう そのーこんな体だしあれ？嫌悪する？

「…………少しは変わるかも」

「そうか」

今日は何事もなく部活になつた

『部活』

「はーはー（両手をパンパン）組でストレッチしてからラリー！」

ダブルス

「はー」

パン パーンと音が鳴る

「ちゅうと赤羽を来て」

「あ……はー」

《顧問部屋》

「あなた来週の試合出る~」

「え？ ハイ！ 是非！」

「予定とかは？」

「いえありません」

「そう それじゃあ来週の1~5日、出麗ね」

「そう書いてプリントを渡された
船橋に合流なさい」

「ひつて一日は終わった

「ふう~」

私以外に、和田さん、別ペアの美東さん、東さん、蝶田さん、鳥野さん、戸曾さん、霧さんの4ペアだ

男子も来ているのだが名前がいまいち覚えられない

輝也君の組ペアは相手は井町さんだ

『開会式を始めます 選手の皆さんは第1パート～第4パートに集まつてください』

「開会挨拶」

「～省略」

「審判の説明」

「本大会は日本テニス連盟公式ハンドブックより～省略」

「それでは試合のパートを発表します」

「この大会はトーナメントである

「～武羽・和田ペア 第14パート」

「いじう……」

和田さんは超無口キャラだ

「うんっ」

相手は仙崎中学校のエースペアだ

「礼！」

「おねがいしまーす」

「トスしてください」

「ジャンケンポン！」

「表でお願いします」 私

「裏お願いします」

負けたほうがラケットを回転させて地面に落とす

「表です」

「レシーブお願ひします」

「乱打お願ひします」

乱打とはラリーの練習である

「レディー！」

レディとは女の子といふ意味ではない、「やめてください」みた
いな意味

「5（ファイブ）ゲームマッチ プレイ！」

上からのサーブ 和田さんがレシーブ

和田さんは後ろについて私はラケットの根元と先を持つ

相手がストロークを打つて来る

ボレーをする 結構これで決まるのになあ

なんとか返される

和田さんの握りが違つ……基本がウェスタングリップで和田さんは

イースタングリップだ

理解した カットだな

カットとは回転をかけてバウンドを変化させる打ち方である
ザシュットと逆回転がかかり敵はそのバウンドを見切れずロビング
ロビングとはロブのこと ボールをあげる（上に打つ）山なりな
ボール

それを私は渾身の力をこめてスマッシュ！

「セイツ！」

相手の意表をついてこの点は頂いた！
ポイント

……がんばれば勝てるかも……

10月15日(2)

『表彰式を行います

』省略

女子個人・優勝 水戸・美談ペア
準優勝・武羽・和田ペア

私達は結局決勝戦で負けちゃった……

「和田さんつ 惜しかったね!」

「…………うん」

返事しないのか……と諦めたその時、言つからな……分からないんだ
よね

……男子個人優勝・俊咲・尾田ペア

輝也君は圧勝だもん……凹む……

これにて表彰・閉会式を終わります』

「さあさあ(両手をパンパン)準備してー 帰るわよ

私達はバスに乗せられて来たのだ
バスの中では

「武羽ちゃんす"ーー" とか

「和田さん カツトうまいー」 とか

「俊咲君かつこよかつたー」 とか

みんな口々に囁し立てている

『校庭』

「はいはい(両手をパンパン) バスに忘れ物はない?
いいね? それじゃ私の所見を3つほど

1つ目は和田さん、カットは強いかもしれないけど」「じゃとこいつと
きだけ使わなきゃ
武器にはならないわよ

2つ目は全員、サービスの特に上からのサービスが入って無い
これも相手に圧力をかけるいい手段だからサー・レシを練習する」と
最後に応援の声が小さい 敵チームの声に押されてる
これだけを踏まえて 今日は解散「

やつとだー

ちなみに男子は顧問が別なので遅い模様
輝也君を見て見返されて私は目を逸らした
真っ赤になつて逃げるよう帰る
あんなことしなきゃよかつた

時間は遡る

『試合テニスコート 第3コート 応援席』

私は輝也君の試合を観戦していた とても声は出せない

周りに人が居過ぎて恥ずかしい

輝也君は後衛でなんとか踏ん張つている

この点を取れば3:3取れなければ4:2でゲームを取られて負け
になる場面

ハラハラして試合をみんな観戦していた

その時敵チームがカットをかけてきた

それを私は気付いて思わず

「輝也君！ 気をつけて！！」

と特大の大声で叫んでしまったのだ

それで輝也君は1歩前に出ておかしいバウンドに対応できるといつ
にいたのだ

試合が終わつた後に真っ赤になつている私に

「応援ありがとな。 お前の声ががなきや 打ち返せなかつたよ」

「 ッ ... 」

と撫でてきたのだ
やばい.....と逃げ出してきたのだ 周りの女の子の視線がいたい
それからちゅうど逃げた先で私の試合があつたのでそれ以来顔を合
わせてないのだ

《学校からの帰り道》

「 はあ~ ... 」

10月も半分が過ぎ6時となればもう暗いのだ
コロンと右ころを蹴つた
思い出しては赤面し思い出しては赤面する
黒歴史認定だよお

1-0月15日(2)(後書き)

この度題名を変えました

「おはよー」「おはよう」
今日は輝也君机に伏している なぜか耳まで真っ赤だ
風邪もあるのかな?
でもこの前のこともあるし……話しかけられない
「式羽先輩 少し話があるんですが」
「……誰?」
「1年の寺我^{てらが}と申します 二人称はなんでもいいです」「
ガバッ!と輝也君がこっちに向いてきたがすぐに元に戻った
「お時間は取らせません」

『校庭・部室倉庫裏』

「話といつのは簡単な質問です」
「なに?」「
「では2つほど……妖怪は信じますか?」
「!!! 信じる」
「それでは 俊咲先輩の正体を知つている?
あれですよ吸血鬼^{バンパイア}」
「!!!」
言つてもいいのだろうか……
「知つてるわ」
「そうですか それでは最後にひとつ付け加えましょう
吸血鬼^{バンパイア}以外にも妖怪はいます
気をつけてください また会うことを……」
そういうと歩いてどこかへ消えた
なんだつたんだろう?

『1時限目 数学』

なんだろ？ 聞いたほうがいいかな？

「輝也君？」

「……」

無視かな？

「あなた以外の妖怪はこの学校にいるの？」

「……」

また無視されたっぽい

「それじゃあ質問を変えるわね 妖怪は吸血鬼バンパイア以外どんなのがいるの？」

「……」

「ちょっと？」

後ろから服を引っ張つてみた

「うわあ！？」

「十字架ロザリオあてるわよ？」

「スミマセン それだけはお許しをー」

スッパーン！ 輝也君の後頭部にチョークが直撃！

「私語を慎みなさい」

「はーい」「はーい」

事は3時限目に起つた

『3時限目：保健の少し前』

今は授業と授業の間にある休憩時間、つかの間のひと時である
私は水筒から暖かいお茶をズズツと吸つた これがなんともいえ
ない……

すると私を……いや学校をとんでもない瘴気が襲つた！

この感覚 あの夜に似てい……

『出で来い 俊咲』

「……」

輝也君はビックリしたようだがすぐに気を取り戻しキツツと囁つきをきつくした

すると夜限定のハズの吸血鬼バンパイアの人格を表に出した

「フン……3下が」

すると口調が一気に変わり目には瞳孔の黒い線、

あのときには気付かなかつたが犬歯も相当伸びている

髪の毛はいたつて普通だ

「どけ」

窓に足をかけると次の瞬間一陣の風が吹き荒れた
目をやると其処にはもう誰もいなかつた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9863y/>

妖怪恋物語

2011年12月1日20時52分発行